

常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』翻刻(五)

徳岡 涼

渡邊 道子

凡 例

一、本翻刻は、本学常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』(五冊)のうち、第五冊目の「はし姫」く「夢のうき橋」について、可能な限り原本の様態を復元し得るように翻字することを目的とする。

二、右の目的を果たすために、翻刻の際には次の基準を設けた。

- 1、改行は原本に従う。半丁毎に「印を付してその下の()印内に、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付記する。但し表紙・見返し・前後遊紙の場合は、その旨を」印下の()印内に記載し、丁数には含めない。
- 2、本文・書き入れ注共に全て原本に忠実に翻字した。猶、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。
- 3、一応現行の字体に翻刻するが、異体字を残したところもある。又、意識して片仮名表記がなされていると思わ

れる部分に關しては、片仮名表記を残すこととした。

4、見せ消ち、合点、濁点その他の諸記号は、可能な限り、原態に即して表記することを原則とした。また頭注・傍注・脚注等の書入れが二行以上にわたっても、そのまま忠実に再現した。

5、紙片貼付の箇所□印、また注記・補記すべき箇所については□印を用い、下の欄外にその旨を記した。

三、各巻の礎稿の担当は次の通りである。

はし姫・椎かもと・総角・早蕨・やとり木（渡邊）

東屋・うき舟・かけらふ・手習・夢のうき橋（徳岡）

翻 刻

（外題なし）

（白紙）

（白紙）

（白紙）

（表紙）

（見返し）

（前遊紙オ）

（前遊紙ウ）

はし姫 ひもし清てよし一禪御説也然共当流には濁てよめり

宇治十帖は花鳥ノ義よし大貳か書といふ説あれ共不用之只式部
か書たると見てしかるへし さりながら大貳か書との一説もあるとは

先々心えて置へし 十帖史記の世家セイケにあてゝみるへし世々

を兼たるも世家と云也一代の人を列傳と云也 此十帖は

雜篇也然間さら／＼と聞よし内篇外篇は聞にくき書

様也史記も如シ此此十帖は来世に通してさら／＼と書る欽内外雜

の事は前にしるせり 又列傳たるにより其人の前ノ事も

ありす多の支もあり前後そるはさる也 又此十帖の内に

花鳥ニ誤あり薰匂などの年齢のかんがへ相違也

卷名はし姫の心をくみてたか瀬さす棹のしづくに袖そぬれぬる

又一名へ優婆塞 うは塞かおこなふ山のふかき心と云詞あり

(一行分空白)

晁花云薰十六より十八までの事とあり不審十九より廿一の

冬まで欽是宇治へ心をよせつかうまつり給事也 此ほかの支猶

古抄共ニ委見たる間注スニ不及

すぢことなるへき——母かた源しのはゝかたよりもよし

中／＼——此中／＼よく立たりあしく置は中／＼といふとそ

詞立かたきもの也

北の方 八宮のきたのかた也大臣の女也大臣は誰ともなし系

図にあらはさず

いとうつくしけなる——後到大君と云は是也

うせ給ぬ 北の方

ㄥ (1ウ)

ㄥ (1オ)

第一丁右肩ニ「九条」(單郭朱方印)。
右下隅ニ「實踐女子大學圖書館印」(單郭朱長円印)。
ラ捺ス。

ほいもとけ——
御出家の夏也

ひめ君は心ばせ——大君也

たつぎなき
きもしにこる

つぎくにしたかひて 下々の者ほと早く行ちる也

おさなき程を見捨ててまつり——
めのともはや行ちる也

れいの人の一
好色の事

わかるゝほどの――死別なり

立をくれけん 当代ならは立をくれけると讀へし

なをしのなへばめる—— 姫君たちへの礼也昔は親子のうへ

なれ共か様ニありそと打懸給ふなるへし

うき身と兼給り契は宿縁也

さうがもし給
かもし濁

ちゝみかとも――
八宮ノ御事也父御門は桐壺

世中にすみつく——世篇かたの事也

おちおとど——母方の御おうち也

うたづかさ 楽道の司也

あなたさまの――源しかた

此宇治山ニ
ひじりだちたるあざり
官は阿闍梨なれと

隱遁の。ふかき人なれはかく云り

さるへき文なと 経文

宰相中將——薰也

「(2才)

「(2ウ)

なけき侍り給ふと—— 異本ニ歎き侍りたうぶとあり是も
給ふ也

中将の君は中く—— 薫也

うちくにも—— 八宮へ内々御伺ありて下されよと也

好色心にてはいさゝかもなし真実ニ法文を聞度思ひ給り

はゞかるべきにあらねど—— 卑下也

こゝには 八宮の御自言

きしかた行末—— 薫をほめ給り

ひじりだつ人ざえある—— かほるの心中

おほやけ事にいとまなく—— 公役の事也

此君も かほる也

すい身の音もせさせ—— 先をゝはさせ給す

みこの御さんの音と—— 八宮とおもひ給り

なにかしかかきりある—— 何カ而

ことやめては—— 夏止

有かたき世のためしに—— 管絃の御上手又はひめ君の

美人なる事世ニかくれなしと也

簾をみじかく—— 高く捲事也

はしらにすこしあかくれて か文字清ム

手まさぐりにしつム—— 濁ル

是しても月はまねき—— 撥にて也

そひふしたる人—— 中ノ君なり

よそにおもひやりしには似す—— 山里のさまニあらず余処にて思ひ

「(3才)

「(3ウ)

しに相違と也

物のくま—— いけうなる所有^夏へきと也

やをら立いてゝ—— 白中ニ御歸り有へければとて御車

曳にやる

このみすの前には—— 薫のことは也

わかき人／＼の—— 大君の心

何事もおもひしらぬ—— 同人の御詞也

ひき入りながら—— おくふかき躰なり

かつしりながら—— 道心を也 薫の詞そ

思ふさまに侍ん おもふ様^{よう}なり

みすの中にこそ 爰にて句を切て次を讀へし

いともあやしく—— 弁ノ君か詞

き帳のそはよりみれば 老人のみる

さし過たるつみ—— 同人の心中

あやしうなり給て 薫の不審し給也

三条ノみやに—— 女三宮也

藤大納言と申なる 紅梅右大臣也

さすかに打出す成ぬ さすかと云詞こゝニ能叶へりあしく置ケは

不^レ聞へ大事そ 申過したるによりて也

夢かたり—— 夢合の人の夏也

こち／＼し 是は古めいたるやうノ心也常のこち／＼し

きニは心かはれり

かのおはします寺 八宮の御座ある阿闍梨ノ寺也

「(4才)

「(4ウ)

御かへり聞へつたへ—— わかき人／＼の躰なり心也

例のいとつゝましけにて 大君の

雲のある—— 大君の哥也 みつから仰らるゝ

何はかりおかしき—— 風流かましき事はなき也

世の人めいて—— 好色めきたる躰にもゝてなし給へる

哥 吾はさもなき物をと也 薫の

橋姫のこゝろを—— 大君をさしての給り心をくみてとは

心を量るなり

哥 なかめ給らん—— さひしきさまを云り

さしかへる—— 三光院殿の御説は行かへると云心と也

まほ—— まをと讀へし 舟ニハさほと讀也

墨つき見ところ—— 京よりの御文也

あひなくとゝめ侍て—— 詞を残しゝ也

中／＼所せかりける 処せはきやうなると也

君は姫きみの—— 君とは薫也ひめ君は大君也

なからん後も 八宮の御詞也

三ノみや—— 匂宮也 薫の心中

いとさま／＼—— そなたに多御座有へけれ共少の端も御見せ

なきと也 薫の詞そ

よづかぬ

こち／＼—— 古めきたり

まほならんはや 爰に句を切て下をよむへし

打おとろかされて—— おとろかされて道心かすゝむと也

「(5才)

「(5ウ)

ひお虫にあらそふ—— 蜉蝣^{ヒラムシ}氷魚^{ヒヲ} 兼てよめり
御あるし 當世ふるまひなと云儀也

ぎなと 儀理也

色をも香をも—— 世間ニ着し給はぬ心也

しるへする物の音に付てなん—— ものに付てならは引んと也

河なみはかりや—— 合奏せず

いとくちをしうおほす 薫の心中

おちあぶれてさすらへん吏—— あぶれてと云もさすらへん

と云も大略おなし儀なり

おほえぬつゐてに—— おもひよらさる事也

いひつたふるたくひや又もあらん 薫の語也余人又しるかと也

時くたふたりの中になん—— 弁と侍従と

今はのとぢめに成て かしは木の

ねんじ侍つる 念力

冷泉院の女御 かしは木の兄弟

れいのあけはてぬ 先度も如此也

院の女一宮 冷泉院の女一宮也^{母弘徽殿也}

唐のふせんれうの うきをりもの也 浮線綾

御名の封 名を片字書て封に付を云也

又はしに 端かきの事そ

^哥松のおひすゑ すもし清^メリ

かひくさゝ 古くさき也

宮の御まへに 女三宮なり

ㄥ
(6ウ)

ㄥ
(6オ)

(五行分空白)

追

かのわたりはかくいとも——やむへきけはひにも——

此姫君などはかくのこく埋れて居給へき事ならねはと云心
打かくろへつゝおほかめるかな—— かげの夏は世に多
からんといふ心か

けにおちたらしよと—— 此外にも又落ちりて有う

するよとの心歎

宮にもかく御そうそこ—— 薫よりの文の御事を八の

宮へかたりて見せ申^林

何かはけさうだちて—— 八宮ノ詞也姫きみに御返事

あれと也^林

なからん後もなと一こと—— 姫君ノ夏なからんのちも

薫を頼と一言いひしを左様の夏にそ文をも給り

つらんと也^林

かのわたりは——曳こめて—— 宇治ノ宮の事也 引こめて止

へき——とは薫のやむましき間何とそして見せ奉^林と也

(六行分空白)

(白紙)

椎かもと

卷名歌ニあり

立よらん陰とたのみししめかもと空しき床になりにける哉

薫廿二の春より次年廿三の夏までの夏也^時

┌ (7才)

┌ (7ウ)

┌ (8才)

┌ (8ウ)

花鳥とは相違

右大殿 夕霧也

宰相中將 かほる也

河よりをち 川のむかひ也 （送）

たぎのばん 石はじき也 盤 ぎ文字濁也

水かげ 惣別よからぬ詞也但是は柳あればさも有へし

をちのしら波 薫をさして也

こゝは又さまとに—— 夕霧のかまへられたる所とは様かはる也

みゝなれぬけにや 風情かはりたる也 かたぎかはりたり

大きみ なきそん王めくと同事

藤大納言—— 紅毒ノおとゝ

おほせごとありて 勅詔也

うるさくて—— 筆者の語也

宮はをもく—— 八宮也 死別截行ノ心つよさ也

かきりなき御心づよさなれと ま心—— 真心 濁へし

なげのいらへ けもし濁へし

其秋中納言に—— 竹河にありし事そ 列傳なれば前後混乱す

宇治にまうでど 濁る

くちうなどにて 河海ニあり 三光院殿の御説は宮中

猶いと心くるしかるへき—— 残多キ心也

いかゝさおぼさざらん—— 薫の心也八宮の心をおもひやり給ふ

すへて誠にしか思—— 好色を思はぬ心なり

「（9才）

「（9ウ）

尻付キ、書キサンタカ。

やみ給ぬる—— 中君の

よこもれるとちに—— よこもるとは行多久しき人々也

いかならん—— 枯せん かれまじいなり

外さまにも—— 余所ノものになす事也

まめやかに思すらん—— 匂宮ノ真実ニハ思ひ給はしと也

世の事として—— 八宮の御詞なり

人にたかひたるちきり—— 殖宿也

あす入給んとて 山寺へ

こと葉にて聞え給ふ 御文をもえあそはさす

ごとく 濁る 各々なれへ也

な出給そと—— 御帰りは御無用とあさりの申さるゝ也

入道の御はい—— 御出家あり度と姫君たちの御心中

中納言とのには—— 薫

御ずぎやう 濁れり

中納言にはかうと—— 匂宮の御心也薫にはかうもなきを

我にはつれなきと御恨也

小萩か露の—— 匂の御庭のやう躰也

物みえぬ心ちし給へは—— 中君の躰也

我レさかしう

もろ聲に鳴 歌の上の心は鹿と鹿と也下ノ心は吾と鹿ともろ聲

あめもよに 雨夜なり 又雨をもよほすと云事ニ用ル所もあり

何れかいつれならん かもし清へし

一ところの御かけに—— 八宮の御事也

「(10ウ)

「(10ウ)

あまは見しり給ねど 薫より外の人^の支は知給ぬ也

御いみはてゝみつからまうて給り 薫の

ひんかしのひさしの—— 別屋なり五十日は別屋におはす也

ことゝいへは 其支といへは也 ことゝあかなれはなと云には替れり

それはことゝくと云義なり

たくひなけなめる御有さま—— 此御歎のやうなる事は稀也

むかしさまにても—— 八宮の名残とても也

しらぬ人にかく—— 大君

色かはる浅茅—— あさは一段とはかなく色かはるもの也

おとろへたる人ともおほし とものともし清

世中のにほひ—— 福德の支也

心地なからぬものに—— 心あるものに也

秋やはかはる 同秋もおなし秋の中にと也三秋の中ニ也八宮御死去

八月

かゝるさまの人影なとさへ—— 大徳共なるへし

時／＼の御念佛—— 四季の念佛

この比の事とて しはすの支也

かたらひ給ふ 姫君たち

かけ道 いつれもくるしからず但爰は清て然へし

うら山しくそ—— 歌まてにてはいひ足ぬニよりてかく云り

惣メ袷葉はあしき詞そ

墨染ならぬ—— くらぬりニ白キかな物は服者の道具也さなき

を取出給へり

ㄥ (11ウ)

ㄥ (11オ)

おもひぐま くもし濁ル

里のしるべ 案内者

をとけたる 清濁かくのことし

立田川のにごる——にこると云事也

人の見たてまつりしらぬ事を——薫の語也

匂の御心を我は見しりたると也

わが御みつからのことゝは——大君のわが事とはおもひ給ぬ也

かの御心よせは——匂は中君に御心さしありと也

雪ふかき——大君の哥也

御ものあらかひ——前ニ匂宮への文の御返事ありつるを

とかほること葉つめに申給なり

えんげに けもし濁 艶気 風流かましい也

御ゆかなと——床 ちやうだい也

みさう——御知行所ノ事也 さもし清へし

いもゐ 齋

心をやりて——自遣て也

有ましき事かなと——御返事あるましき事にて

なしと也

おゝいとのも——夕霧の六君也匂のおぼしいれぬ也

まめやかなる人の 薫也

猶あらしに 天然事ニなと云やうなる事なり

女一宮も——薫の心かゝる人なり

くろきあはせ——大君なり

髪さはらかに うすき也

ひすいだちて——うつくしき様躰也 翡翠 鳥の

「(12才)

「(12ウ)

下ノ字ヲ擦リ消シタ上ニ書ク。

名そうつくしき鳥也 たもし濁る

(二行分空白)

追

君か折嶺の—— 姫君の哥也 君とは八宮也上ノ詞にも御

くしなとおろし侍もおはせましかはとあり蕨は必八宮のをり

給へきにあらね共歌の体也うはそくの折給ふ蕨ならは

春ともしらん物をと也林

宮も猶きこえ給へわさと——

宮は八宮也八宮の姫

君達への御詞也欤

おぼろけのよすかならで人のことに打なひき此山里を——

ちと聞にくし早竟のたしかなる変にてなくは人ニ随イ給ふな

私後來吟了すせう／＼のたよりならではと云心也此卷ニおほろけ
とのをしへ欤」 (13ウ)

の人に心うつるましき人のとあり是もせう／＼の人にはと

云心なり おほろけならぬ事なると云心也林

又了簡おほろけならぬとは慥の議也然は慥なる事ニ非ずは同心し

給なとの心と聞えたり

宮も猶きこえ給へ—— 八宮の心也姫君ニにほふ宮への御返

事あれと也 すき給ふ親王ミコとは句の御事也こなたよりは

しらぬかほよからんと也林

中／＼心ときめきにも—— 返事なくは却てけさうびたらん

となり林

猶もあらぬすさみなンめりと—— なをさりならぬなり

たゝにとあらぬなといふ心なり

「 (13オ)

「 (14オ)

とき／＼中の君そきこえ給ふ 姉君は書給はて妹の中

君そ匂への御返事書給ふ^林

また夜ふかきほとに 薫宇治より京へ帰り給也

心ほそく残りなけに ー うはそくの宮の心細々色／＼遺言

有しニすまひの更はてゝやかて参んと也薫の心也^林

私残なけにとはうはそくの御身の命残りなけ欵

ひたふるに思ひなせは ー 一向におもひ取て過せは年月

はさて過る世なりけりと云り姫君への遺言也^林

さるかたにたえこもりて ー ^林尼などになれは女は却てよきと也

世に聞え有ましき ー させる人ならぬはすゑの世にとろへ

たるも苦しからすと也^同

かゝるきはに成ぬれは ー 宮などの様に位高き人の衰るは

くちをしからんよく姫君たちをうしろみよとなり^同

さすらへん契を ー 姫きみの行末を也^同

むまれたる家の程 ー 其／＼の家ニ生れ付たるほにしてゐよ

と也^林

けに限ありけるにこそと覚ゆるも ー 命はかきりある

物なれは思イにも叶消ぬ習ひそと也

あさましう今までなからへ ー あね君かほるへの御返事

ことゝいへはかきりなき ー 薫の詞也あまりなると云やう

なる心也一葉 其事をことゝいへはげうめうなると也^林

その更といへは也^花

月日の影は御心もて ー 前の詞に空のひかりみ侍らんもつゝましく

「(14ウ)

「(15オ)

とあり其返答也 けがれたる人は月日のかけにもあたらぬ物
なりとの給ふを我とはれ／＼しくなとの給て端へも出給はゞこそ
くせ事ならぬめ人のあいしらへに出給は何かくるしからんと也又
思しめす^{ツボ}変もあらは調んとなり林

行かたもなく—— 引哥わか恋はむなしき空にみちぬへし

おもひやれとも行方もなき同

なをあらしに—— こなたへ参る事かなきと云心也あなたへ

姫君達の御出あるを聞て也

あなのすこしあきたるを—— 薫のゝそき給り

あなくちをし—— のそき給ふ穴の口ニ木帳あれはのそかれぬ

を口をしきとて帰らんとし給ふ時分ニと也

引やりて 破て也^{ヤブリ}

その御き帳をし出てこそ—— 風のさはきニ穴の口ニある木

丁を簾のもとへ立よと云人ありのそき給方のき帳をはしの

みすのかたへやる也^林

なをさりことなと—— なひきやすきやうなる人はおもひ

おとし給ふ変もあれと也心も留給ぬよしを聞と也しかる

へき人と云心也^同

何事もあるにしたかひて—— まつ世上の人の事を申し

給也是より薫の姫君へ教訓也おとけたるとはほれたるやうの

心也よからぬ人の事也先の給也

中／＼長きためしになる—— をとけたる人は極慎なる

やうに見ゆれ共終にはさもなきと也

┌
(15ウ)

┌
(16オ)

くつれ初ては—— 引哥神なひのみ室の——

をとけたる者は上のみる目は極慎なるやうにみゆれとまことはいふ
かひなき心なれば河岸の崩々、様に思の外なる心もおくると云
義也 名残なきやうなるとは極慎に見えしなこりもなく

短慮なる変ありと也一葉 是は兵部卿宮うへはあたに

見え給へと底にかくおはす心を姉君に薫の語給ふことは也

前のおとけたると有も女の心を立ぬ儀也さ様ニ心浅き女は匂宮の
見さめし給ん也此姫きみたちはさも有ましきと也

私心なかきためしになるやうもありくつれ初ては立田河のと有

つゝきやうちと聞えにくし 心なかき——ありされ共さ様のおとけ
たる人はくつれ初ては立田川のと見るへしよからさる人の事共也

(八行分空白)

(白紙)

総角

歌と詞とを以て巻の名とせり あけまきニ二ッあり童をも

云又車などに糸にて組て懸るをもいふこゝは糸にてしたるを

いへり 薫廿三也椎本は廿三の夏までの事あり此巻其焔

より其年の暮まで也廿歳と云説あり不可然 古抄ニ猶委

あけまきに長き契をむすひこめて同し所によりもあは
なん

又蓬生の巻には牛をあけまきと云る欵

(一行分空白)

伊勢のこも 哥人のいせ也

みつからの御上は—— 薫の

┌ (16ウ)

┌ (17オ)
└ (17ウ)

押紙。

宮の御吏をそ 匂宮の御事

まけじだましゐ 濁

御けしき見たてまつる 色／＼ためひて見たる心也

世のありさまなど―― 薫の大君へ申給り

この給めるすちは 好色の事也

おほしをきてげる けもし濁

さるは少しよこもりたる―― 中君の事を大君のゝ給也

あつかはしう―― おもひあつかふ也

後の世ざまの さもし濁

物づよげなるはいかに 爰ニテ匂を切テおほしをきてつると下を讀へし

をのつから聞つたえ―― 弁を相手ニして薫の詞也

さるへきにニてこそ―― 宿世にてこそあらめと也

宮の御吏をも―― 匂宮の御事なり

例の――心の中にはあらまほし―― 是は弁か心中

なり 弁をほめ給也

中の宮をなん―― 大君の心の中君を薫にと思す

哀なる御一言を―― 八宮の御遺言の事也

きさいの宮はなれ／＼しく あかしの中宮也

まはゆくありつかず おもひつかず也當座の好色かましき事は

嫌となり

かたくなしき 愚痴なる事

あざやかならず―― 爰に云るは。聊相違也ぎやうぎを

くづしたる様なる儀也

然ハ鮮トハギヤウギをくつさぬ事なるヘシ
當ニ鮮ならぬと云ニハ

┐ (18才)

┐ (18ウ)

┐ (19才)

ともおほとなぶら 外も也 薫の方へ

かたはらふし給へり そと横さま居給ふ様躰也

思ひ入るゝもはかなしや 薫の心ニしみておもひ入給也

いとかうしもおほさるゝ 薫の心

聞給ふ事多かり 大君の心

人よりはけに かのるの夏也

光見えつるかたの 明方のさま也

朝露もえ分 薫のこと葉なり

あさまじうかたはならんとて 大君の詞そ

山さとの 前ニ村鳥なと云る是によりてとりあつめたと

讀り此歌恋の詞すこしもなし

れいならす人のさゝめきし 此宮は 中君也

はかしくしうはかなき事を 御吊をする人なしと也

心ばなとえこそ 心はに付るかざりの糸也くみたる糸欸

花鳥ニくわし

うすにび ひもし濁

近おとりしては 中君を薫へ引つけんと大君のおほす也

あらため給へらん長月も 忌日に重服を脱て薄色をきる

物也親のは忌日過ても其月中は重服をきるとそ

しつ心なくて 待かねて薫のまいり給

とり分て人めかし 弁を薫のなつけ給り

むかしの御をもむけ 大君の中君へ申給詞也

面たゝしく

ㄥ (19ウ)

ㄥ (20オ)

猶これかれ—— 大君の詞

八宮の事

一ところおはせましかは—— 中君と大君と也

おなし心に何こともかたらひ—— 好色の事

中ノ宮はかゝるすちに—— 好色の事

ほともなくて 爰の心はせばくると云心也

けせう けもし濁ル あらはと云心也 顕證

さはいへと—— 弁心ある人なればさはいへどなり

此君のさかり過—— 中ノ君の事

いとあはれとみたてまつる 弁か心中

さのみこそは—— さうのみこそ也

それと思ふやうなる—— 弁か心

二ところなから—— 大君と薫と

きこえさせ給んにしも 句を切て下を かく世に——

かしこけれど 恐かましけれと也

うつくしう—— 敵重也

御とのごもり 御ををゝと讀給り

ほかく—— 大君の心也中君を也

おほしうとまんと—— 大君の心也中君を也

しそじつと 読給り

大かたれいの見奉るに—— 薫の事を老人の云也

つらき人の御さま—— 大君の叟也 薫のこと葉

昨日の給し事を—— 大君の心を

ㄥ (20ウ)

ㄥ (21オ)

きしかたのつらさは—— 薫の詞也

身もなげつへき—— 引哥ニ及す総ノ引哥ノ事式部引たるもあり

又は後人の引たるあり一様ニ定まらず式部か引たるは勿論也

心たかくと—— 匂宮へ大君の心移事

おろかなる心ものし給は—— 中君の薫へおろかなる心あらはと也

さばかり恨みつる—— 前の恨色くを今はうらみの其

名残なしと也さつと書給たり

哥
山姫の—— 薫をさして山姫と云り

えんしはつまじう かほるの心中

身をわけて—— 先ニ大君のゝ給し事也

とにかくに心をそめし—— 大君を思ひ初し也

お前のせんざい 匂宮の御庭の事也

猶うへになとも—— 匂宮の也

猶わつらはしがれは かもし濁

大野 名所にてはなし たゝ廣き野也

哥
霧ふかき—— 大かたにては見えぬと也

いつかたの恨をも—— 大君にも中ノきみにも也中ノ君を

匂ふニぬし付て大ききニも恨られまじいと也

おはしますへきやう—— 匂ニ薫のをしへ給ふ詞なり

きさいの宮 あかしの中宮也

おはしぬ 薫はかり宇治へおはす也

けいめい—— けいゑいの事也 経営いとなむ心也

弁めし出て 薫の

ㄥ (21ウ)

ㄥ (22オ)

ひたやこもりにては—— ひたやこもりとは無意趣の事也

思ふ事をも云すして意趣なきやうにては止ましいと也

こと人と思わき—— 中君の夏

姫君はしり給はて 大君也

めもあやに—— 肝のつふるゝ也

やんことなきかたにおほしよるめるを—— 匂宮へおほし

よると薫のうらみ給也

おほしよはりね 薫の言葉なり

あが君—— 大きみをさして

山鳥の心地して—— 尾を隔てぬるもの也

よへのかたより—— 匂宮の出給り

みなわらひ給て—— 匂も薫も

たのもし人 大君なり

まめやかにあるへきやう—— 言葉なと好みて書せたてまつり給

御つかひくるしけに—— 明石中宮などはいまた知給ぬ事なれは

使はゝかりて也

つゝませて 墨衣ニ入ル、事也

世中に久しくも—— 大君の心そ

いひしらすめれは す文字清へし

おほしをき侍しを し文字にこるへし

み心さしもまさるに 匂の

人のみるらん事—— 大君の心也

さうやくもやと—— 三月の夜なれは雑役の御用もや有んとなり

ㄥ (22ウ)

ㄥ (23オ)

かけこ入て

かけじとぞ思ふ し文字濁

まかて給ふましけなるを けもし濁ル

うへもうしろめたけに—— 今上也匂の父御門

大ばん所 女房の侍どころ也

所せき身 高人の吏也

さはり所 かゝるところ也

此君はうちにさふらひ給ふ 大裏ニ

いさめきこえぬか—— かもしにこるへし

大宮 あかしの中宮

女一宮 匂の御兄弟

大かたはつかしけに—— あかしの中宮ノ御事

たくひあらしいや 中君の御事也 し文字濁る

ありつかず 似合ぬ

ひめ君われもやうく—— 大君也

めもはなもなをし—— 直也

宮は有がたかりける—— ありにくき隙也

身をすてゝなん匂を切て下を譲也 常に——

いつきすえたらん姫みやも 匂の御兄弟

中納言のはつかしさ—— かほる也

思ふかた異にて 薫は大君へおもひを懸らるゝ也

絶せじの—— 中君の哥也 たえましいと仰らるゝを我心と

たのむと也

┌ (23ウ)

┌ (24オ)

物なけかしき—— 中ノ君の事

限なくあはれに—— 匂の御心中

わかき人の——哉 評して草子ニ書たり

まきれさせ給ず えしのひ給ず

明る日ごとに 毎日の義也 あくる日又明る日といふ心そ

ひとつ御くるまにて 同車也

つふやきつる—— 此間御無音と云て腹たちし也

姫君もおり—— 大君也

さかしら人 薫の事也

かすめつ—— さたかには仰られす

もの思ひくはふる—— 大君の詞也中ノ君へ匂宮ノ御

跡遠の事なり

吾おもかけにはづる—— 宇治十帖第一の詞と云傳えたり

けに心つくしにくるしけなる—— 大君の心に中君を

右のおほいと の 夕きり也

けにたゝ人は—— 薫をさしての給也

かくいと心くるしき—— 薫の心中 匂宮の事を

あなかちにもかくろへす 薫の媒したりし夏をかくし給す

衣かへ—— 十月の衣かへ也

いと忍てきこえ給て奉れ給ふ 宇治へ

十月一日 カンサウキツイダチ 如此よむへし

さるへき人など—— さかなゝと馳走申ス人なるへし

さうじみの御ありさまは—— 匂の御事也 サウジイ 正身

ㄥ
(24ウ)

ㄥ
(25オ)

宮の大夫ダイフ

衛門督 夕きりの一男

かすならぬありさまにて 中君の心

中納言の君も中く 薫也 京より歴々参り給へは

参入ことならぬと思ひ給り

忍く^ニに 句の事なるへし

いつそやも そもし清^ム

いつくより 一つくを道にして也 是はからより也

親王ミコのわかくおはし 八宮の叟也

焮ヒはて^ム 中君ノ御方をおもひ給ふ

引つゝきて 車

かたはし 苦しくなん 筆者の詞

姫宮は 大君也

かう見をとりする 大君の心也 句の中君を也

おもひいられ給ぬ 思ひ入れ

ある人のこりづまに こゝに有^ル人也

かゝるすちの事コトをいかてと 薫^ニ大君をいかてと思ふ也

つみなど なんと也

此君を見たてまつり 中君也

かきりなき人に 句の御叟也すくれたる人を限なき

人とは云也

山さとの御ありき 今度の紅葉見の事也

ゆくりかに 不意^ニ也

ㄥ (25ウ)

ㄥ (26オ)

ことやうなるぞや 人々かはりたる叟也

れいさまに さもしにこるへし

すちことにおもひきこえ—— 行末は位^ニつけんの御心也

時雨いたうしてのとやかなる日 閑なる日の事そ

在五か—— 人の結ん事をしそ思ふと云哥は人か何とか

おもふらんと憐愍の哥也

物へたてたる—— 兄弟にてなくはと也

うらなくものをと—— うらなく物を思ひける哉と返

歌をし業平のいもとの叟也 女一宮と云説あれとそれはわるし

御心のうつろひやすきは 匂宮の御事

なやましけに—— 大君のなやみなり

人の御上をさへ—— 薫のことは共也

みず法 清濁いづれもくるしからず

殊更にいとほしき—— はかなく成むの御心中なり

いと哀にいかにものし—— 薫との間也

いとうしろめたけれと帰り給 かほるの

所さり給ふに—— 病者は所をかへて養生をする事あり

わか殿こそ 薫の事也 我也若^ニ非ず

しほれふし給へり 中君

よはき御心^ちに—— 大君の心中

はつかしけなる—— 内の者ともなれは愧かしくはなき也

みやりつゝ 大君の中君を見やり給り

姫宮ものおもふ時の—— わさと—— 大君中君の事を思ひ給也

「(26ウ)

「(27オ)

つみふかゝむなる—— 父宮の御更也 親のいさめしと云よりして

云出たり 俗なから行イ 給ふ人なれば也

色あはひ 色あひなり

花^あくとして

古宮の—— 中君の夢ニ

誰ためおしき命にかは—— 中君ゆへと也

(二行分空白)

御心をしり給はねは 宇治には匂の心をしらぬと也

此御中を—— 薫あね君との中はなれ給ふましき事

なりと云り^晝

おほつかなくて過給^ぬへき—— 過侍ぬへきは死侍也

御くしなと少しあつく—— 熱気也

日比見たてまつり給へらん御心ちも—— さふらひたる人く
 (28才)

くたひれぬらんと薫ノの給也

かたつかたの人に—— 匂宮ニ思ひくらへたり薫はねんころ也

老かれにたれどいとぐうつきて 老て聲の喎たる也 ぐうつきては

功つもありて歟

常不経をなむ—— 古抄共ニ見たり つかせは拝する也ぬかづく

也

君もいみしう—— 姫宮也

かのまだ定まり給はざらんさきに—— 三有あり本有

中有生有也 未定生所 是を中道と云

まで—— まうでゝと讀へき歟

「 (27ウ)

物おもふ人の—— 中君のみつからを物思ふ人と讀給り唄

引さけ奉る 曳のくる也

けふりもおほくむすほゝれ給す—— あけまきの君瘦

さらほひて虫のからの様なれはたゝ時の間に跡かたもなく成れる也
又なき人にみえ給 無き人のやう也御歎の余ニ也

ゆるし色の氷とけぬかとみゆる—— くれなゐうちのきぬは

氷の様ニみゆるもの也河海ニなみたの氷ニ云なし侍るは然へからず

ぬらしそへたるは涙の事也 氷とけぬは打たる衣のきらなるへし

しとみおろさせ給に四方の山のかゝみとみゆる——

しとみおろさぬさきの事歎又は別の所よりみゆる歎

恋侘てしぬる—— 薫の哥也姫君をふかく思ひて死ぬる薬

を飲たけれ共恋ニ死んたよりなければ佛法ニことつけて身を

なけはやと思すは心きたなき道心者にてあると也

雪の山にや跡をけなましなかなる偈をしへけん——

雪山の鬼神の事也諸行無常の偈の義 詳河海

いふかひなき御事をはさるものにて 大君の御夏はさてをきてと

云心也

ましていかにおもひつらんと—— 匂の御心に女の心をくみ給り

この宮にこそは—— 匂宮ニこそ也

かほがはりしたる 顔替

なまうしろめたければ—— 匂ノ御心ニ中君の心や薫ニ

うつらんなと思給也 唄

宮のおほしよるめる—— 薫の心中也 花鳥ニ詳

「(28ウ)

「(29オ)

「(29ウ)

追

今いとうつろひなを—— 薫の中君へ心のうつらんその

いはれを云へき事にやと大君の思ひ給也

かしつくものゝ姫君も—— 世間の事なるへし誰にてもなし

おいつき書給て ちらし書ニあらて首をひとしく書たるを云り

よそに思きこえしは—— おもひしり給 前々よそニき

及しは邂逅ニ一くたりの御文さへつゝましうあるやうニ聞しニ

今とだえの程をさへ心細々おもふは我なからいかゝと中君思ひ給り

袖の色を引かけさせ—— 服衣の事をの給ふは今はしめ

ての事かは此間うはそくの御座ある時よりむつましく馴ま

いる夏は姫きみへ心を懸る故ニこそあれ心浅くわきまへ給ふ

物哉と也林

さはかり忌をつへく—— 服のほとを過してなどの給へ

からすと也

あつかはしくおほえ侍れと もてあつかふ也 さしをかす

心をつくす也

しきみのいと花やかに—— 櫛などの匂をも花やかに書

なせる尤おもしろしく

人よりはけに佛をも—— 佛をも人にまさりて

たうとみ給と也姫君の御事を薫のかく見給ふなり

わつらはしう墨染の今更—— 薫の心也姫君の

服衣の時分をわりなしと思召も理ハ也御心にもつるには

思ヲボし捨給はじ御服すきてとつよく思なして帰らんと也

「 (30ウ) 」

「 (30オ) 」

それと思ふやうなる御事ども也 弁か詞也匂宮ニ中君然る

へからんとなり

二所なからおはしまして――

中君は兵部卿あね君は薫

へなり是も弁か詞也

かく世ニ有かたき―― 宇治の宮の物さひしき事を

世にありかたき躰也と云りされは姫君たち人ノ申ス

やうになひき給はゝ有かたきかなしさはあらしと也

此とのゝさやうなる心はへ―― 此殿は薫の事也父宮の

如此の給しとなり弁か詞也林

もどきいふ人も侍らじ さは有まじい事と云人有ましとなり同

つくり出まほしけなる―― 弁か詞也こなたよりなり共

申度ニ心さしふかう薫のおほしよる事然へきと也林

雲霞をやはなと―― 雲かすみにはよも乗給はしと也同

私そむくとして雲には――伊物

をそろしき神そ―― 玉鬘――思せと 此事

書ニ主なき女を讀りとあれは尤々爰に相叶へり

神のたゝりにて姫君の薫を嫌給ふかと也

おなし枝をわきて―― 姫きみのあまり吾にのかれ給へ

るをかこちて匂宮ニ御心も引やの様ニ云なし給ふ事度

ノ也其心椎本より此卷ニいたるまで所々の詞にあり同じ

枝とは匂と薫との事を云り然るを姫君は匂宮へ心をそめ給へとも

こなたの心さしは匂宮よりも深きをおほししり給ぬを恨

て兩人の心さし何れかふかき志と思召すそと問はやと也林

「(31才)」

「(31ウ)」

又ひたふるに身をも思捨まし—— 姫君のつらさに

身をも捨んと思へ共又中ノ君ニ一夜契しかは中君をほた

しにて又ひたふるに捨かたきと也^林

かけくしき—— 薫の詞也かゝはる夏は兄弟なからあらじ

何れもわすれはせじとなり

使くるしけにおもひたれは—— 曳出物を使辞退也

然は使のとも持せらるゝ也

いひしらずかしづくものゝ—— 昔物語などの事也世上の

人のうへの事也此山さと住にて物はちなとは道理と也

家にあかめきこゆる人—— 宇治ノ宮のはかくしからぬ

御さまなりされ共人遠く物ふかくならひ給るとほめたる也

つゝましうはつかしう—— 匂などの参り給を也

田舎びたらんかしと—— 姫きみの心也此山里ニ生レ出たれは

いふ事もあしからんとつゝましくおもひ給也

さるは此君もそ—— 中君の事そ更に山さとびすして

よく御入あるとほめたる也

哥
さ夜衣きて—— 薫の中君への歌也上ノ詞にこだい

の事なれと云侍はさよ衣きてなと云る事也双帯の地也

哥ノ意はなれたる事はなれとそとはかりは馴しとなり 又

かごととはかこつ心もあり其は匂宮へ逢給る事を也^林

私 中君の匂宮ニ逢給へる事を薫の恨て匂宮ニなれく
しくとは仰られす共少しのちきりをはかはし給つらんとの
心歎

「(32才)

「(32ウ)

おとし聞え給り　おとす心也　かこたむとおとす也

みそびつあまたかけご入て　懸ご色ゝゝ入る也

人／＼の御れうにとて　姉妹の御為に也

色なる御心ニはをかしく　匂の色／＼しき御心也色ニ染ム

心なり林

かれは思ふかたことにて　中君の心也薫はあね君へ

心の引と也

余所におもひ聞えしは　匂の事也中君ノ心也聞しよりは

すくれたるとなり

日比へてまいり　薫のことは也久くありてうちへ御参り

有て又こよひうちに御座なくは彌中宮又は内の御けしきあし

かりなると也

今夜さふらはせ給はて急　宇治へ三日めなれは匂の

御出あり度けしきを見て薫のかくの給也林

わつらはしき宮つかへの　薫の詞也　匂宮のかゝる好色かたは

かほるのしわざと明石中宮の仰らるゝと也林　大はん所にて人

の申つるは某匂^{ツレカシ}への宮つかへ開事のやうニ有て吾等^{まて}勘当かうふるへ

きよしを承と面あ^ツかめて薫のの給也林　おもてあかめてとは

顔の色^ツのたかふ事也　是を中宮の御かほの色あかめて仰らるゝとも

所せき身のほとこそ　匂の御心也可然身は何事もくるし

世をも捨はやとの御心つかひと也

いとをしう見たてまつりて　匂の物思ひ給けるをかくみる也

かほるの御心そ

┌
(33才)

┌
(33ウ)

おなし御さわかれにこそは—— 薫の詞也とてもかくても

同し御せつかんならば今夜う治へ御出あれとなり

掠めつゝ—— 匂の好色かましき事をさたかにはあらねと大やう

に申給也林

されよとおほしく—— 姫君の心されはこそ思ひしにたか

はす中君を忘はて給と也 私爰もとの詞つきちと聞にくし

了簡し心をやりて見へし

いとをしくしておほしたるさま—— 薫の詞 匂のありさま姫

君の間給ふ程に匂のふかく中君をおもひ給ふ事又我匂の

有さまを見ありくやうなと語る也

紅葉のくちばはるけやり 爰にて匂を切て水のみ草と讀へし林

かつはゆかしけなけれと—— 薫のか様ニあつかひ給事なり

ゆかしけなけれ共是もさるへき契にてこそ有らめと也姫君ノ心也

みゝなれにたる猶あらじ事と—— 匂より常にわか思ひ

の事をの給ふ由也姫きみたちの心中也林 あらじ事とは

思ひ給よし仰らるれ共さも有まじきをと云心也

との人 殿人 薫のとの人也御下官也林

時々折ふし—— 宇治の宮の人くくの心也年月時々

御出の時なさけうく何事をもかたらひ給しよりは猶此

間日比へて薫の御座ありしは何事にも思やり多く御座

ある物を今はかきりとなし申さんは哀きと也薫へ人くくの

執心也林

まめなるかた 物なんと給はる事也同

「(34ウ)

「(34オ)

まだ夜ふかきほとん——

面白き詞也。家卿の哥ニ誰

はかり山路を分て問くらんまた夜はふかき雪のけしきにと
詠し給るも此言義より出たるへし

あげまき

糸を結たる物也うはそくの御法事ニ旗け

まんなとしたてゝ向の寺の阿闍梨へ参らせらるその総角
を姫君たちの結と給也

(白紙)

(白紙)

(白紙)

早蕨

歌と詞とを以て卷の名とせり但哥ニハさ蕨こと葉ニハたゝ
わらひとありかほる廿一歳なるへし総角ノ次ノ歳の春也

(一行分空白)

やふしわかねは 引哥 日の光——

もとすゑをとりて—— 哥の上下なり

宮のおはしますさす 八宮也

引はなちてそ—— 一字つゝ書たる也

ことの葉をめてたく—— 句なとの御文なるへしそれよりも

此阿闍梨ノ文哀と也

くちおしかる いとさかりにといふより爰まで御まへの女房共
の心なり

かの御あたりの 薫より也

いやめになん なみたかち也

まして色めかしう 薫の実人さへなきみわらひみの給ふニまして

ㄥ
(37 才)

ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ
(36 ウ) (36 才) (35 ウ) (35 才)

匂宮はと也

やみはあやなき——

引哥 春の^{よの}やみは——

みそきも浅き心地そする 浅くおもふに似たると也^ハ 猶河海ニ

御車御せんの人^ハはかせ—— おまへとは讀す女も^{アリ}

はかせをそふるもの也

哥
はかなしや—— 薰ノ歌也此議よし中君の上を思給也或説に

中君の哥也 此歌除服して当の衣に程なく更ん夏はかなき心と^{みるへし}

花のひもとくを面白き心にしては中君の心にくけなるへし

霞の衣花のひも春の哥なれは也 霞の衣は服衣ニよ^{そへ}

花の紐とくは除服ニよそへたり扱もほとなく時刻の

うつりけるよとよみ給り

御わたりのかつけ物—— 京にわたり給て人^ハニ下さるゝ

もの共也

いとくやしうおもひ—— 薰の心也 前に一夜なれし中

君の事なるへし

哥
思ひ出らるゝつまなり^{フマ} 端

袖ふれし 薰の歌なり

弁そかやうの御ともにも—— 御供せん共おもはす

こゝには猶とき—— 薰の詞そ

引哥
いとふにはへて—— 弁の詞也命残りたる心はかり也

後撰
にくさのみますたの池のねぬなわのいとふにはゆる物にそ有ける

あやしくもいとふにはゆる心哉いかにしてかはおもひやむへき

いとよくいひなくさめ給 薰の

ㄥ (38才)

ㄥ (37ウ)

思ひ侘てはなとかゝるさまにも—— 薫の心也大君を尼ニなし

奉ん物をと也然らほもし御命や延なんと也

哥
しほたるゝ—— ことなれや—— 中君の哥そ 弁尼か袖に

同しと也 私此やとあるはやはの心歟

さるへきてうとゝもは—— 弁ニ給はる也

かく人よりふかく—— 弁か歎ク事の深を云あね君の事を

思ふなり の給ふにとは中君歟

わらはへの—— 子の母を恋るに似たと也是は弁か支歟

哥
しなてるや—— 河海 咲花ニ詳

としころ人しれぬ—— 大君の事なるへし

此君さへ—— 薫也 夕霧の御心也懇ニわか云出る事を

承引し給ぬと恨給り

宮の御もとに参り給へり 薫匂宮へ御参る也

宮出給んとて御まかり申に—— 匂宮中君へ御いとま

こひニわたり給り

なとかむげにさしはなちては—— 匂の御こと葉そ

御あたりには—— 中のきみのあたり也

打かへしの給へは 匂の返く仰らるゝ

一かたならすわつらはしけれと我御心にも——

中君の御心中也 かの人もは匂宮歟

(八行分空白)

(白紙)

(白紙)

┌ (38ウ)

┌ (39オ)

┌ (39ウ)

┌ (40オ)

┌ (40ウ)

やとり木

卷名寄生と思ひいてすは木本ニ旅ねもいとゞさひしからまし

又一名貞鳥かは鳥の聲も聞しにかよふ哉と茂みを分て今日そ尋る

詞にはみ山木にやとりたるつたの色とありやとり木は木のほやと

云物也葉ニ桑寄生とてあり桑ノ木ニ生す又楓にも生すつた

をやとり木と云は木ニかゝれるものなれば名をかりて云り誠の

宿木ニハ非す

辨云此卷薰廿三より廿五まで也 并ニあら

ね共堅横交はる也前ノ卷ニ此例あり 此まき椎本ノ末より

総角ニ八宮ノ周忌の事早蕨ノ春などの更こもりて又次ノ年ニ

移レリ卯月までの事なり

をちなとやうの

かくよろつをうしろみ奉るにこそ——

女三宮を後見也

御碁のかたきに—— 相手也

よぎのりものは—— 女二宮の事を含ませての給也

のりものとはかけもの也 縣ノリモノ

おりておもしろき枝を折て—— おりてとは庭へ下_{フリ}

さまくゝにいとおしき人くゝの—— 宇治の大君ノ中ノ君を

わか御かはりになとゞ有し事也

あまりおほかなかりける 筆者の詞なるへし

此おとゞにあまりゑんせられ—— 恨みられん也

ニシ 怨此字 ウラミ 歎

宮の御おほえありさまから—— 匂宮なるへし

かゝらんとする事とは—— 中君の心なるへし

山路分いてけんほと—— 宇治を出給し更也

└ (41才)

└ (41ウ)

忍てわたりなむ—— 中君宇治ノ宮へ

一日の御更はあさりの—— 文牋也 是は周忌ノ事そ総角ニ有リ

爰は其折ニ當る歟 総角ニ混乱せる歟

さりぬへくは—— 中君の吾をも憐み給へと仰らるゝ也

宮の今めかしく 匂宮也

うけ給りぬ一日は—— かほるの返事 文章也

女君もあやしかりし夜の事—— 先ニそと逢給し更也

宮の御心はへおもはすに—— 匂宮の御更也

さだかに有ましくは—— たもし清む 宇治への道

少しはことほりなれと—— 薰の中君に道理を付給り

こはなぞ—— かほるの心詞

かやうのすちは—— 筆者の詞也

うとくしく—— 薰の詞

こしのしるし—— 懐にんの帯也

うちにいとわたらまほしけに—— 宇治

うけたまはりぬいとなやましくて—— 中君ノ返しの文章

なき人の御かなしさは—— あね君の事

今日は宮渡らせ給ぬ—— 匂宮也 薰の心中

俄にわたり給へるなりけり 匂のわたり給り

何かは心へたてたるさまにも—— 中君の

打とけぬところに—— 六君ノ所なるへし

あなかななりつる人の御けしきも—— 薰の事也

おもひきこゆるさま—— 匂宮の

押紙。

ㄥ (42才)

ㄥ (42ウ)

吾もほろ／＼と—— 匂宮の

さはかりかゝやくはかりこまもろこしの——

六君の御方の為躰なり

かの人のけしきも—— 薫の事也

六条の院には御文をそ—— 六君也

中納言の君はかく宮の—— 薫也

はゝ宮の御かたに参り給て 女三宮へ

宮はをろかならぬ—— 匂宮

世にひゝきたる御ありさまの—— 六君の御変

中納言の君は—— かほる也

おとこきみも—— 同人

むかしの人のなやみ初—— 大君なるへし

いひなし給ふを かほるの

むかしより思ひきこえし—— 薫の

かの御耳ひとつには 中君の一人のみゝ

いひなし給ふを 薫の

きゝゐたり 少将なるへし

きく人あれは 同人なるへし

うちにはおほさる 中の君の心

むかしおほゆる人かたをも—— 河海にあり 一云たゝ昔ノ

人のかはりニと云心はかり也

かの山さとのわたり—— 宇治也

金もとむる—— 昭君か古変

┌
(43ウ)

┌
(43オ)

花ふらせける 呼ニ云術にて花ふらせたる事ありと云々

此義可用_ミ

このちかき人のおもはん事の—— 少将なるへし

年ころ世にや有んとも—— 手ならひの君の更也

尋出たりしを 中君へたつね来れり

夢語 薫の聞給ふ

宮のしのひて—— 八宮の

忍草つみをきたりける——

引寄むすひ置かたみのこたになかりせは何にしのふの草をつまゝし

世を海中にも—— 貴妃の古更

佛にならんはいと—— 薫の山里の本尊にもとの給ふニ

付ての詞也_花

かのなけかせ給めりしも—— 弁か詞也中君の御事也

御ありさまをほのかに—— 六君の御更たるへし

空しきそらにのほりし—— あね君の御事

其御心さしも—— 古八宮の

とまり給はん人_ミ—— 御女_ミ達の事なるへし

たいくしき事也 しかるへからさる事と也

此たひはかりこそ見めと—— こほす程にみん事は此度斗と也

古大納言の君の御有さまも—— かしは木ノ更也

宮よりも時々は参りて—— 匂宮より

思ひくらへ給 かほるの

かの宮には尋まいり 中君へ参りたり

ㄥ (44才)

ㄥ (44ウ)

かの君のとしは廿はかり—— 浮舟の事

むかしの人御けはひに—— 大君の事も薫の心詞也

さやのつゐてに さ様の次手也

こたに 蔦ノ類也 又云木ニ取付たる虫のからの類ト云々

蛸竹治反班身小虫也玉扁木蛸

宮に紅葉たてまつれ給へれはおとこみや——

宮は中君歎おとこ宮とは匂宮なるへし

かへり事かき給へ見じやとて し文字濁れり 匂の御詞也

山さとの御ありきの—— 文章

琵琶を引ぬ給り 匂宮の

菊のまだよくもうつろひはてゝ て濁る 咲花云尾花の

さま時分に合へし色の換したるには非ず

花の中にひとへにと—— 不是花中偏愛菊此花開盡

更無花元頼猶河海ニ委

なにかしのみこの此花—— 西宮左大臣 猶咲ニあり

かはかりの事も—— 匂の御詞也

此ころみるわたりは—— 六君なるへし

その中納言もさたむめりし 薫なるへし

かはかりの事もへたて—— 匂の御詞也

かのとのには恨めしく—— おとゝの—— 夕霧なるへし

やかて曳つれ—— 匂を御同道にて出給ふ

御みつからも—— 中君

れいならぬさまに—— 同人御懷妊

ㄥ (45ウ)

ㄥ (45ウ)

宮また御らんししらぬ—— 匂宮也

きさいの宮より—— あかしの中宮

一ところの御心さしこそ—— 匂宮

中納言のきみは—— かほる也

女二宮の御もき—— 今上の御子母へ藤壺の女御也この

巻ニ内ノ御さたにて薫を簾ニ取給り

中納言の君は宮の思しさはくに—— 中納言は薫也宮は

やかて其ほとに参り初—— 匂の御事歟

此御事のみ—— 匂の心中 中君の御事を也

なをし物—— 河海にあり

権大納言ニ成給て—— 薫の

右のおほいとどの左にて—— 紅毒の右大臣たるへし

この宮にも参り給へり

なやみ給ふ人によりてそ——

此宮もわたり給て——

宮のおまへにもせんかうの—— 匂宮也

ふずく—— 花鳥ニ委し 餅ノ類也

大いとのよりつかうまつらせ給り 夕きり也

宮のはしめて—— 匂宮也

御みつかからも月ころ—— 中君なり

又の日なん大將まいり給ける 薫也

右大臣もめつらしかり—— 夕霧也

古ゐんたに 源氏の御吏

宮はけにとおほす 落はの宮

└ (46ウ)

└ (46オ)

「薫」ノ上ニ「匂」ト墨書シタ
小紙片ヲ貼付。

心の中にはことにうれしくも—— 薫の心

宮のわか君のいかに—— 宮は中君也句ト見ても相違なし

みつからも例の宮の—— 自は薫れいの宮は句也

おはせましかは—— 大君の事歎一

若君をせちにゆかしかり—— 薫の

三条の宮ふたかるかたに——

おとゝをはしめ奉て—— 夕きりなり

三宮ひわなと 匂宮也

大将の御笛は—— 薫也

上へより給はす 今上

宮の御かたより 女二宮歎

宮まかてさせ奉り給ける—— 女二宮

心おこりせらるゝ—— 過にし方の—— 是は薫の心也過

にしかたとは宇治のあね君の事

くち木の本を—— 弁ノ尼の事也 引哥形こそみ山かくれの

おいや—— おいはおうと云心也 さる事ありと云心也花鳥

此しん殿はまたあらはにて—— 新シくて也いまた首尾せ

さるやうの心也

さうしのあなよりのそき—— かほるの

とみにもおりで—— て文字濁ル うき舟の車

君は車を—— 薫の也

胸うちつふれつゝ見給 薫ノ見給

やゝ見て久しく—— うき舟の

「 (47才) 」

「 (47ウ) 」

押紙。

やう／＼こしいたきまで—— 薫の せじゞし文字濁欵

まらうとの方ニ来たり うき舟のおはす所へ来れり

はめつるさうそく—— 田舎人のほめたる詞先ニ

むごに御心地—— 無期

かれをもくはしく—— あね君の事なり

宮の御方にもいとよく—— 中の宮也

古宮の御子にこそは—— 八宮

君もやをら出て—— 薫なり

しか仰事侍りし—— 尼のこと葉

(五行分空白)

追

あらずや忍てはよかるへく思す事も有けるか嬉きはひか耳か

聞えさせとそ 薫の詞なり あらずやとはさ様にてはなきか

と云る心也 一日うれしく聞侍し心の中を—— 中君のの

給し詞前にありそれにこたへて薫の今の給事也うれしと

仰られしは某かひか耳にて聞ちかえ侍るかさやうにてはなきか

申ことはらんと也 是はしのはて申すもくるしかるましき事

此段聞にくし是私の了簡也猶後來達者ニ尋申へし

(一行分空白)

大藏卿 今上女二宮の御おぢ也 藤壺女御の兄

三條の宮ふたかるかたに—— 女三宮なるへし然は薫の御

藤つほに上わたらせ給て うへとは今上也 所なり

世をうみ中にも—— 楊貴妃の古変そ長恨歌ニ

「 (48才)

「 (48ウ)

「 (49才)

押紙。

若き人のある先おりて——又をとなひたる人いまひとりおりてはやう

といふ—— わかきもとなもうき舟の同車と見えたり

(一行分空白)

悦に所くありき給て—— 薫の也 此宮にも参り

給へり とは匂宮也二条院たるへし いとくるしくし給へは——

中君なるへし こなたにおはします程なりければ とは匂欸

やかて参り給り 薫欸 僧なとさふらひてひんなき

にと—— つきもなく似合ぬ所ニ匂宮御礼義の詞也方乱り

かはしき折節との給ふれ也 引つくるひ給ておりて答の拝

し給 匂なるへし とりくにていとめてたく御両所のさまなるへし

扱爰にて切て下をみるへし やかて今夜つかさの人ニ録給ふ

此儀は六条院にて行なはるゝか 曙云大将のつかさ共ニろく給所

へ匂宮をよひ給し也匂をあるしの処ニと六条ノゐんへ請し申給へ

とも中君御なやみ心えなく思して此辞退ありされ共御出

有けり後の詞に此宮もわたり給てとあり是ニテ知レたり

右大臣のし給けるまゝにとて—— 曙云夕霧ノ大饗の例にて

かほる大将の司の録を六条院ニテし給し也

爰も見分かたき処也 私ニ了簡せり已後違者ニ問尋て
明らめ侍へし

御ぞのなれはぬきをきて 鳴也 薫のき給ふ御ぞなるへし

(白紙)

(白紙)

(白紙)

東屋

ㄥ (49ウ)

押紙。
訓ミ仮名「ル」ノ一部、右ノ押
紙ノ上ニカカル。

ㄥ (50オ)
ㄥ (50ウ)
ㄥ (51オ)
ㄥ (51ウ)

卷名歌を以テ号す

さしこむる葎やしけき東屋のあまりほとふる雨そゝき

哉

此卷薰廿五 秋八月比より九月迄の事あり

花鳥には廿二とあり如何

(一行分空白)

つくは山を――

野花 浮舟ノ君は常陸守ノまゝ子なれは

筑は山をと云りおもひ入にはさはらざりけりト読る哥ノ心

あれはふかく尋給へけれ共受領の女なとを尋かゝつらひ

給ん事を人きゝいかゝと憚り給ふなるへし薰の上薦しき

舂しるへし

左近少将とて

大将なりし人ノ子也 明 大将先祖不見 是常

陸すけか聲也

なみ／＼の人にも物し給はねは 左近少将をさる人の子なれは

かく云り

目をはつかにさしいつはかりにて―― うつもれたる心也

ころの御とく―― 孤露也みなし子の様ニたのむかたなき心也 花鳥

孤露はみつからと云心也猶河海にあり ひとり也 和秘書

こたみの頭は 此度なり 藏人頭なり

こて給へるなり 和秘書 聞えごつと云心也こもり濁ル 和秘書

但又清てもくるしからず

萬の事たらひたる朝臣のめを―― 主人ノかく仰

ある由を媒ノ取添／＼ひたちニ語ル 万の支足らひたる。とは 朝臣

少将の事也

ㄥ (52才)

ㄥ (52ウ)

擦り消シノ痕アリ。

めのわらは 女童 むすめ也

君すこしひなひてそ有とは——

左近少将ノ心也

蘂夷^{ヒナヤ} 舎田^{シヤ}びたる枕草子

大臣にならんぞくらうを——

大臣に成給んニ物を出し

給共足ぬ事あらしと也少将の心ニあまりなる事とおもへり一葉
質^{チシ}の心也俗ニ賃をぞくらうと云々 公記^{コキ}云大納言献^{ケイ}メ

續^ツ勞^ス申^ス官^ス云々河海 少将ノ大臣ニなり給ん續^ツ勞^ス

を常陸守の方より出させて取らんと媒の云詞也

咲花にはそくと清^{ムト}アリ

わかほひはかのかんのぬしの——

ほひとは本意也 かむの

ぬしとは常陸すけか事也かんは守也ミトむト相通也ぬしと云は
かしつく詞そ 守主 猶河海ニ委

親にしられたてまつりて——

八宮ニ知れて生たち給は

ましかはと也 おはせず—— 是も八宮ノ御事也

あひく^ニにたる—— 咲^ニくはし

打なけきつゝいふ 北の方ノ

我君をは心はせあり—— めのとの詞也

宮のうへの—— 夕霧の御息女 匂宮ノ御上欵

いふかひなくさまあしき—— 常陸か事そ

此程はあらせ給へ—— 少将の掣取の間はこなたへ浮

たいふかもと—— 薫ノ家人なり中君の女房也 大輔 うき

舟の方の女房を給へと云也^林

此御かたにまらうと住つき——

浮舟の住し西の方也まら
うとは

「(53ウ)

「(53オ)

「雛」カ。

少將たるへし

宮にとは思なりけり 注にかく書也宮とは中君なるへし菟

角中君へ参せんと母君のおもへり

いてやその本尊—— うき舟を見度とかほるのゝ給也

時ゝ心やましくは——

又ものおもひや添んと也 一葉

宇治へかよはゝ本尊の願立てゝ一筋ニ心をすまし度と也

心をすます事を山水ニよそへていへり然るを物おもひ添て

心やましくは心の水もにこらんと也

さるものゝつらに顔を外さまに—— さる物のつらとは柱の

かた屏風なとの方へかほを藏し給也 林

おぞき人—— きふき事也 めのとの事也

物きこえ侍らん—— めのと右近へ云詞也

こせんにこそは聞えさせんとてたつ 中君へ申さんと也

右近か詞也

右近とて大輔か娘 此大輔并ニ娘右近慥ニ不見古キ

系図にもなし中君かたの女房トみゆうき舟ノ巻ニ右

近といひしは別人なるへし

中務宮参らせ給ぬ 系図ニなし句の御弟也今

上の御子ト云く中宮の御悩ニよりて参給り

大夫 タイプ

たゝなるよりはいとをし 睨ニくはし 但うき舟の心ニかたはら

いたくおほすらんと云説もあり如何々 又たゝなるよりは

いとをしとは双紙のこと葉也何となくいとをしと也 林

┌
(54ウ)

┌
(54オ)

ふたりはかりそ—— 右近と少将也

お前にてえ耻あへ給はねは—— うき舟の右近

なにも打とけて見え給ぬを中君の御前にてはえ

かくれ給ぬなり林

私たちの侍らんやうなる—— 花鳥ニ委 又私たちは

萬つに機をつかふもの也物をうたかはしくおもふによりまかけを

さす也にくみ恨られ侍るとはうき舟をわたし置いて疑はしく

心もとなき変ニよりこなたかちにさふらは常陸には恨み

らるゝとなり 下ノ詞に御まかけこそと中君のの給もうた

かはしけにの給ふかわつらはしきと也林

心地なくなとはあらぬ人の—— うき舟の母の心也心有

人なれとゝなり

いふ事よ兵部卿の宮の萩の—— 少将の云詞也

ことたにおしきと宮の打す—— 匂宮也

うつろはんことたにおしき萩萩におれぬはかりもをける露かな

なをくしき変ともをいひかはしてなん—— あまり何の

手もなく正直過たる哥也筆者の詞なるへし人ニいさめなり

さまかへてけるもくちおしきまで—— 薫の心なるへし

さまかへてとは寝殿を作改メたる事歎

すこし近きほとならはそこにわたし—— 宇治へ

浮舟をやりてもと浮ふねの母の文章そ

あたこのひしりたに—— 河海 愛宕聖者空也上人

事歎彼山ノ縁起ニ曰空也上人出ニ清水寺ニ發誓願ニ曰念佛行

「(55ウ)

「(55オ)

何ノ処にしてか慈尊の出世にいたるまで相續ノ靈地たるへき
祈念せられけるニ觀音告給ハク愛宕山月輪寺ハ是補
陀落山同淨土也魔界断レ跡聖衆影向之所也於ニ彼所ニ此行ヲ

可レ始之由有ニ夢想仍^テ彼山ニシテ多年練^テ行^ス其後於ニ洛中ニ念
佛ノ行を弘通し諸人を度せらるると云々取意畧抄

三代格僧正真濟空也海大師ニ從テ真言ヲ傳愛宕高

雄ニ十二年住メルト云々

師云

いがたうめにや——

説々あり何れもきつねを

たう

めといへは狐の人をたふらかす如ク中立をして人をはかる
事ニたとへたり伊賀伊勢ノ諺ニいふと云々又平聖の末

社にたうめの社と申は狐なりト云々猶古抄共ニ見えたり
の給しまたつとめて——あさはかりとの給し日の

事也さうの物ともは御庄の者共也付よと也ハ警固

せよと薫の仰られたる也

やかのかつみの角より——やかとは家の支也家の字を則ち

やかと読ム中納言家持^{サカサ}百人一首かさゝきの作者

おほどれたる聲して——程々の物賣者どものつれた

ちて

ものゝ名を云也扱下の詞に名のりしてと云拜のふつゝか
なる也

「(56ウ)

名のりとは賣物の色品をいふ事なるへし

君もみる人にはにくからねと——薫也みる人はうき

舟なるへし

御なをしの花の——

しのひかたけなる——我も忍やかに——薫の

「(56オ)

おかしきほとにさしかくして 扇にて

(五行分空白)

追

あひくゝにたる—— 相手くゝのにあいたる事也

宮の北のかたのもとに御文奉る 中君へ也是匂宮ノ北方也

君もいとあらまほしく—— 少将なるへし

まらうとの御てい—— 御まら。とは少将

父ぬし たゝ父なるへし

女君のお前にいてきていみしう—— 浮舟の母

猶此御事はつきせすいみしくこそ

あひてもあはぬ—— 引哥 臥ほともなくて明ぬる

夏のよはあひてもあはぬ心ちこそすれ

そ王のたいの上のうへのよるのきんの聲を—— さるは扇の色も心を

きつへき闇のいにしへをは—— 私班女閨中秋扇

色楚王臺上夜琴声 一首の詩也是は雪の詩そ 扇の色

色も心をきつへき—— と云は此詩の上の句の意をもの田舎人は

知すしてめて聞ゆるはをくれたる心と嘲て筆者の云る歟

秋扇とは弃捐のかた也 班女も夫を捨られたる心を作たる詩と覺たり

此班女班女友 好か事也團雪の扇を作始し者也 晁花には詩句

也と斗あり

(三行空白)

(白紙)

うき舟

(57才)

(57ウ)

(58才)

(58ウ)

押紙。
擦紙。
「上ニ」を「ト重ネ書
キ。」

「婣」カ。「婣」ト書キサシ。

卷名哥を以て号ス

橘のこしまの色はかはらしをこのうき舟を行ゑしら

東屋の巻は薰廿五の九月までの夏也此巻は廿六也正月の

事より三月の末まで 花鳥には廿三歳とあり相違いかゝ

(二行分空白)

かゝるすちに——嫉妬かたの事也

あさはかならぬかたに——大君ニ似たとおほしてなり

御本上なるに 匂宮ノ御心也 本性

月日。へておほししむめる——かほるのあたり也

いつかたさまにも——浮舟薰也 瞬ニハいつれにも匂宮は

尋給へき夏をいとをしと也トアリ

ことざまに さもし濁ル

かの心をものどめ——うき舟の心を也

宮の御かた 中君也

宮の御方には 同人

世中をやうく——中君の心

ねびまさり給まゝに——薰の

こひめ君の——大君也

とし月もあまり——宇治已來の事

をのつからうとき——中君から疎クし給也

外にはかゝる人——六宮

大夫のおとど——大夫殿也 河ニ委

文は大夫かりやれと 大夫を尋てやれと也

┌
(59ウ)

┌
(59オ)

みくるしう—— 中君ノ詞也

御心もなくさめ給へ 中君へ

またふりぬ いまたふれぬ也 古抄ニ詳也歌の意何共

心えかたし

君かため—— わか君の為なり

宮もらうたくせさせ—— 中君

大内記 句の文の師也

おかしき事かな—— 句の御詞也

左のおとゝ 夕霧なり

司めし 春秋にかまはず惣しては秋也こゝには只除目と用

て然へし

三四人 サウシニンと讀給り

むかひたるぞ—— 向居たる人なり 誰共なし

左イ 右の大とのゝ 夕ぎり也

吾もかくろへて見たてまつる 右近が

おもひしつめて 右近

あやしかりし折に—— 二条院にて逢み給し時の事也

こと／＼はかひなし—— こと事也

さらすともにつけて—— 時方か返事也

しらぬを返ゝ—— その人と云事を知ぬ也

つらかりし御ありさまを—— 二条院にて彼ほのかなりし

時のこと也

身のためなん—— 左大臣 夕霧の大将の詞

「(60才)

「(60ウ)

ひしりの名を—— 右近か詞

うらみられ給はんをさへ—— 浮舟の薫=恨みられ

給ん^ニ更を句のおもひ給也

二人なん ^ニンと讀給へり

けしからぬ事をも—— 中君ノ心ニ

人にはこよなう—— かほるよりも思をとし給と也

へたて給ふ御心の—— 浮舟ノ更を御しらせなき事也

物はかなきさま—— 句の中宮をたはかりてあひ給ふ

時の事也

かるらかに あなつらるゝといふ心也

おほえをとる身にこそと—— 中

たゝ此大将の御事を 薫

きのふのおほつかなさを—— 大宮の御文言

み心さはきのいとゝ—— うき舟の事をおほして

心ほそさを添てなけき給 句宮の

あやしうゝつし心も—— 句宮

有し御さまの—— うき舟の心中 句の御事を也

ついたちごろ 二月の 必朔にてはなし月の初メ比なるへし

^哥うちはしの長さ—— ^{思ひ} 句の御事は知たまはて薫の讀給り

たえまのみ—— 是程に絶間あるを猶頼めと仰らるゝ

侘しくもあるかな—— 句の心中 かと也

本つ人 本の男也薫をさして也

かの人の御けしき—— 薫也句宮のおとろき給ふ

「(61才)

「(61才)

いつかたもく 大内記と式部少輔と

侍従をそ—— 若き人と言てかたらひしは此人也

所えかほにゐたり 時方わさとか様の風情したり

いらへもえせず—— 匂宮を禪たる躰なるへし

此大夫とそタニウ 時方が夏也

あはれ多くそへてかたり給ふ 匂の道のさまを取添て語り給り

しびら うはも也 され共何たる物と云事を慥には知ぬ

ものそと素然仰らる

其程かの人に—— 薰ニかくれ給へと匂宮の仰らるゝ也

御文たにこまかには—— うき舟への文

ことにいとおもくなとはあらぬ心ちに 浮ふねの心也

ことおほかりつるを—— 匂宮ノ御文のことは多キ也

うしろめたの御心のほとや—— 右近侍従ニかたる詞也

心ひとつに—— 右近侍従をかたらひ入てからちから

を得たり

歌 御手も—— 風流めかす

里の名を—— 新拾遺に紫式口と入たり作者

分別ゆへある歟

哥 かきくらし—— 浮舟の哥

人にもしらせさりし—— うき舟ノ夏を薰ノ仰らる

大蔵の大夫タニウ 前ニ家司とあり

この月のつこもり 三月の

おはしまさん夏は—— 宇治への事也

ㄥ (62ウ)

ㄥ (62オ)

母そこちわたり給へる 宇治へ来り給る

けふもの給つるを—— 匂の

いかなる御心ちそと—— 懷妊かと也

こゝに参りくること—— 浮舟の母常陸介北方也

大夫かむすめ 右近か事也

心ぎもゝつぶれぬ うきふねの心

よからぬ中と—— 女二宮との間

うちなきつゝの給ふ 浮舟の母の詞也

雨ふりし日 一昨日なり

御せんなとも——

宮なやましけに—— 明石中宮

みやたちもみな—— 匂宮も

一品の宮 女一宮

せうか常に—— 少輔か也

なかのぶ 薫の家司ケイシ也

見つとはいはで 爰にて上は濟なり さて下を見るへし

女のたいくしきそとて—— 右近か姉也

さはかりうへのいたつき—— うきふねの母上也

今イマひとりうたておそろしき—— 侍従言也

ひたみちにいふ 侍従云也

ふでうのもの共—— 不調 ぶたうなる者共也

うどねり ともし濁給り 内舎人ト書

たゝ夢のやうにていみしくいられ給をは—— 匂ノ御夏也御

「 (63ウ) 」

「 (63オ) 」

有さまなり

けしきある 此にて済也さて下を読ム

さのごとき さ様のごとく也 猶河海にあり

をすかるへき—— をそろしき事也

いざとけ也 いざとき さもし清てよし

白雲のかゝらぬ山 浅キ山なり

むこにふしたる 無期

いりきて 侍従かへり来る也

宮の上を—— 中君の事そ

宮はいみしき—— 今日も御文あり

人のいむといふ変なん—— 母惡夢を見給也

解夢書云 夢見病人必死

おもひやり給ふ めのとの事を思ひ給也

(二行分空白)

追

をしなへてつかうまつるとは見えぬ—— 世間なみの文の様

にはなきと云云歟

物へわたり給へかん也と 余所へと云心也爰は石山の事也

御ともの人なと例のこゝにはしらぬ—— こゝとはうき

舟かたの人々也御供の人まては知ましき事尤也

しらぬを返ゝいと心うし 匂の御心か

夜行ヤギヤウ 夜まわりをしてようしんする者の支也

ときく立よらせ給人の御ゆかり 是は薫の室女

「(64才)

「(64ウ)

二宮の御事も親類の事には非ず

あふなくはしりまいる さうなく参る也 林私奥ナク同心ニ返歟

宇治よりたいふのおとどにとて—— 童の詞

こゝにはめてたき御すまいの—— 薰の浮舟をとりて

置給を云り林

またふりぬ物にはあれと君かためふかきこゝろにまつとしらなん

もし奈の枝なとにてまたぶりをしてうづちニそふる事ニや

尋へし猶ふれぬ更をふりぬ云儀へおほつかなければ共古今

の歌ニ頼めこしことは今は返してん吾身ふるれハ

をき所なし此哥はおとこの文を返すとて讀る也わか身

ふるれとはふるされぬれハといふ心ニ讀れはまたふりぬと

云るもまたふれぬと云心ニかなふへきにや林 此段哥も

詞も心えにくし 河海ニ方言曰江東謂樹枝曰杈極

砂磧ニ音 未太布利

おほきお前の御らんせ—— 大き御前は匂の御更也

大殿の君のさかりに—— 夕霧ノ六君の事也浮ふね

におもひくらぶれはをとりぬへき事をみなれぬまてに宮の思

すは御心さしの浅からぬ故也浮舟のをたぐひなしと見

給也 河海の説共猶あり 大殿 何れにてもくるしからす

またしらすおかしと—— 六君より浮舟はましたると也六

君のあたりにては大方ノ人は物でもなく思ふそのあたりは

しらすき舟のやうなる人はまたしらすと也清 河花ノ説

又あり

「(65才)」

「(65ウ)」

「る」ニ「と」ト重ネ書キ。

ひとひなん見しかば花も—— 薫のこと葉也此間みしか

今つくりたる家は此うぢよりも面白からんの由也^林

かの人の長閑なるへき所—— かの人は匂宮也

白きかきりを五ッはかり—— うき舟の出たちの

事也あや也ほめたる詞也^林

宮にはかくれなく—— かほるのうき舟をわたし給ん

用意を内記ありノまゝににほふ宮へ申すと也^林

衛士とも御すいしん—— 薫の浮舟を置へき所の

用意也其を匂へ語る也^林 との人とは薫ノ御内の者也

しばしもまいりこん 浮ふねの詞也 京の母の方へ行

たきと也

かしこもいと物さはかし—— 少将ノ妻の子をうむ折ふし也

はかなき事なとえしやるましく—— 宇治にて女

房のものゐいなとする事也一葉母ノ詞なり猶ありたけれ

ともかしこにも煩人あり又こゝもせはきなと人く

申ほとにまつく帰ると也^清 はかなき事とは子うむ

ことを云也^林

かくなやましくし給て—— 薫の心匂ノうぢへの文

の夏おはしや初にけむとは宇治へ匂宮ノ御出ありつるかとも

あやしめて—— 匂のうき舟の方へ御入ありし日も

ありと聞たきとなりさ様の夏こそ匂宮なやみ給ん

となり薫の心也

むかしを思し出るにも—— 匂の中の君へかよひ給し

「(66オ)

「(66ウ)

「(67オ)

比え御出なかりし時のくるしかりし事なと薫のお

ほしいつると也なをさりに物をおもひ給ぬ人と云心也

御かみづかひ—— 色ゝのうすやうをつかふ事也紙の色也

何かむつかしき—— 浮舟の心ことは也おちとゝまり

てとは文の事也人の御為とは匂の御変なるへし

垣ねのおどろ いばらなり

むごにふしたり 期も無ク也久しく寝たる也啼たる

かほつきを恥て久しくねたり

帶うちかけなとして かけ帶とて女の物まうての時に

かくる也

ひつしの歩みよりも—— 羊は人に引れて屠所へ

おもむく也是は我と身をうしなはんとする事を羊の

歩よりもはかなしと云り

心ちもあしくみなたかひにたり 心たかひたり

女もぬきすへし うき舟物をうすくめす也

(七行分空白)

(白紙)

かけろふ

卷名歌ニよれり ありとみて手にはとられすみれは又

行ふもしらす消しかけろふ 詞ニもあり

此巻うき舟の巻ノ終の其翌日ノ事也 五月に移て秋ニ成也

薫廿六歳 花鳥には廿三トあり如何

かけろふノ夏 蜉蝣 蜻蛉 陽焰 草等説々あり咲花ニ委し

┌
(67ウ)

┌
(68オ)
(68ウ)

(一行分空白)

かしこには人く—— 彼^{カシコ} うき舟ノ身をなけし跡にて也

くはしくもいひつゝけす 此書様妙なり 古物かたりなとに

かやうの事多し同じやうなる夏書て詮もなきと也おも

しろき筆者の心也 住吉はま姿其外古物かたり ニ かやうの 事多し

あしすりをしといふことをしてなく 右近か啼也

かやすき人 ニ は—— 時方なり

又かゝる人 ニ は—— 匂宮ノ御心つくしの事也

はしめよりし初たりしかたに—— 薫の事也

かのおそろしとおもひ聞ゆる—— 女二宮ノ夏也

いひ合せて—— 侍従と右近と

やさしきほとならぬ—— 恥かしからぬ也 古今 何をして身のいた

つらに老ぬらん年の思はん事そやさしき 是もはつかし

忍て有しさまを—— 匂の御夏也 き也

大夫 タタニウ

かたへおはする人—— 兄弟おはする人の事也猶説あれ共如何

此説ましたると也 花鳥にも咲花にもかた親ある夏とあり

心の鬼そひたれは—— 匂宮ノ御事をおもふ是を心の

おにと云也

よんべの事は—— 葬送の夏

いかなる御物のけ—— 匂の御物のけかと也

式部卿ときこゆるも—— 源氏の御兄弟なりかけろふ

の式部卿とはこれなり

「 (69ウ)

「 (69オ)

もし心をえたらんに—— 匂ノ御心中也 薫この蜜通を

もし知られたらんニと也

つれなきと—— 思さるゝ物から 薫は余りの事ニけふ

さめておはする心をは匂宮ノしり給はで如此おぼす也

こめてしもはあらじ—— 藏しは置ましい也

はかなくてうせ侍にし人の同しゆかり—— 失にし

大君のゆかりのうき舟なり

いとあはれなる事にこそ 匂の御こと葉

さる方にて—— 薫の詞

さすかにたかき人の—— 浮ふね也

人木石にあらされは

女君この事—— 中君也

父おとゞ 夕霧なり

いりきたれは 匂よりの御使也

大夫もなきて—— 時方なり

君たちをも何かはいそきてしもきこえうけ給らん終にはつ

かうまつるへきあたりにこそと—— 頓てあなたへ

わたり給ん物をとおもひしほとに急て君たちにも申承ぬ

いみあへさせ給ふましき—— 忌にも取合給す

おはせましかはこの道にそ—— 匂宮への夏

何ばかりのものとも—— 侍従か事也

この人ニおほせたる—— 相應ノ義

ことずくなにおほとか—— うき舟の様なり

「(70ウ)

「(70オ)

宮も——聞給へは 匂のかくし給事ニてもなきかと

我なんえしむずまじきと—— 誠ニおもはぬと也なり 信シツ

いとくおしくされはよと 右近か詞そ

もとよりおほすさまならて—— まゝ父常陸介か

所ニおはしゝ事なり

いつしかとのみ—— 京へ御移リの事也

あつかひ給ふ 此二句をきりて
下を讀給り 母君の——

中くなることの人わらへに—— 薫との間の事

たへ侍す 堪

せきあへ給す かほるの涙なり

けんせう あらは也 れきくニ也

なかもやすらひて 思案したる躰也

うたてあるやうになンとそ右近ナとそ——

かうぞいはんかし—— かほるの詞也

わかゆかりに—— 我ゆへに也

うつせにましり—— うつせ貝也河海説は不用

まいていかなるやみにか—— 母義の事を薫のおもひやり

給也 引哥 人の親の心はやみに——

かのかみの女 常陸守也

思ひしるはかりよういは必みすへきことゝおほす 薫ノ心也

さるはおはせしよに—— 爰は双昏の評判なり

六十僧 ロクジツツウ

右近かもとに—— 匂より

「(71才)

「(71ウ)

殿の人とも—— とのは薫也

す経し給ひ 誦経也ジニハ拗音也 匂と薫也 ズハ直音也

ふたりの人の 匂と薫と也

かの殿はかくとりもちて 薫也

見給ぬのこり多かり 如此よみ給へり愚本にはのこりの

三字けしてあり不審 紹巴校合之本也

この宮もとし比—— 匂宮

いひやぶり 云さまたぐるなり

人よりこと也と—— 薫の見こめ給へり ほめ給ふ也

かへたらはと—— うき舟にわかみをかへたらばと也

此よろこひ—— 小宰相か哥を悦給り

物はかなき住み—— 小宰相局ずみなり

なとてかく出たちけむ—— 宮つかひ。いてたつ也

我もをいたらし—— 小宰相をゝいたらし物を

かほるの心也 妾にすへん物をと也

五巻の日は ゴテン

にしわたとのに姫宮—— 一品宮也女一宮そ

さい相の君 小宰相也

御前とは見給ぬに—— 女一宮ノおまへ也

ものあつかひにいとくるしげ也 其ゆへに結句あつきと

云り小宰相の詞也

聞つけ給はぬならんかし ひとへも袴もすゝしなる故ニ

ならずさるによりて聞付給す

└ (72才)

└ (72ウ)

あさましきまで—— 是は女一宮ノ御夏

はうそく 一説はうそく共何れもくるしからず

なくさめんに—— 女一宮女二宮御はらからなれはなり

女の御みなりのめてたかりしにも みなりとは姿ノ事也

御はかう ハツカウト 讀給り

おろしてもてまからん ツロシ 申下て

一夜の心さしの人 小宰相也

けざんに入—— そんじやうそれえふりたると申上ル夏也

必其目ニ懸ル事にはあらず

今よりならはせ給こそ—— 女一宮の御言葉也細々まい

らんとあるはわかびたるとの御ざれ事也 又女房達ノざれ

事にて有欤如何々

人よりは心よせ—— 小宰相ニかほるの

かたしけなき事といひて—— 恐かましい也

その女君に宮こそ—— うき舟ニほふ宮の心よる

宮もいと浅ましとおほして 明石中宮 事也

さらにかゝる事—— あかしの中宮の御ことは也

哥 萩の葉に—— 薫の作也

むかしの人も—— 大君の夏

えたてまつらさらまし 得の字 えまじきと也

はし姫かな 大君をさしての給り

みやのうへ 中ノ君欤

宮はまして—— 句也

「 (73 才)

「 (73 才)

「 (74 才)

かくてさふらへとの給へと—— 中君の方ニ候へと也
なつかしくかく尋—— 明石の中宮よりの御はからひ也
ちみこははらからのそ—— 式日卿宮なり八の宮と

御兄弟

右大殿

右ノヲトマかやうに讀給キ

この宮そかゝるすちは—— 匂宮なり

人には其わたりの事—— うきふねの吏思出る也

宮はうちの御物かたり—— 内也禁中也匂宮と

あかしの中宮との御物語ぞ然は薫たちのき給也侍従は

余所からのぞく也侍従と御物かたりといふ説は諸抄ニあや

まる但その分ニ見るならば宇治の御物語と見てよかるへし

三光院殿も其如の給りとそ 内の御物語とみる事は也

足軒はしめて見出し給と也

今一ところは—— かほるなり

そもむつましき人—— 侍らぬにや 此やもしやいと心え

へし此段きゝにくし六かしと仰らるゝ

おもなくつくりそめてける身におはざらんも——

弁はか様ニをとなゝれは恥もせず薫ニあへしらひ初て

又はちかくやかんも弁か身ニをはぬやうなるへし似合ぬ也

おきなごと—— 花といへはの歌無風流なりあまりニ

くすんたる哥なれば翁言といへりそれによりて旅ね

の哥をよめり 猶又義ありと仰らる已後尋申へき者

秋の天といふ事を—— 大底四時心惣苦就中腸断也

「(74ウ)

「(75オ)

是秋天自奏

かの御かたの中將の君 女一宮の女房也

このゆかりには 此故に也

かたひ物かな 実くしき者はかたき也

さしはなちかたき—— 中君也

姫宮夜るはあなたに—— 明石中宮ノ御方へ

たゝさなから—— 人の志をきたると調てもみす其

まゝ引給也

ならべても見奉らはや—— 女二宮ニ心懸りて

かほるのかくおもひ給也

いとかたきや 有ましき事と云心なり

御しりうごと—— 薫を聲になとゝ父のかげ事に

の給し事也

み心みたるへきつま—— 匂の御更也

あやしくつらかりける—— 是から先を捨てみるへし

かけるふ 種ゝの説あり爰にては小虫なりはかなき

虫なり

(四行分空白)

追

たゆく世づかぬ 墮竊歟

尼君なともけしきはみてければ 見てければ也先度匂ノ

御事を見つる也

五巻の日 八講の中日なり

ㄥ (75ウ)

ㄥ (76オ)

かれよりはいかてかは—— 薫のこと葉そ

打わすれてしつるも てしはやすめ字也打わすれつる也

せめてよびすへたり 清シ入たり 大蔵の大夫の夏か

けがらひといふ事は—— 林ニ薫の心也わか御供の人にも

心つかひし給もなく成たるやらん在世成らんしらね共と也

御車のしちを—— けかれたる所にては摺ノ上に居ル物

なり のほり給でとは上へもあかり給ぬ也

あかぬこゝちもすべければ あかぬ心すれはなり

かの君にたてまつらんと—— 母の詞也林逸ニ薫へたて

まつらんとしたる也清 林うき舟へと思ひしを大夫ニ出すと也休

うきふねニ奉んとおもひし也直ニ薫に奉るへきにはあらざる也

これはむかしの人の御心さしなり 林うき舟の御心さしと

おもへとて引出ものにとらする也我はびんなき心なり母

義の心なり

いつこにても何事をかはたゝかやうの—— 女共の答也

一品宮はいつこにても月を見琴などにてあそひ給也

すゝろなる歎のうちわすれてしつるもあやし——

一品宮ニけしきはみたる風情を人にや見ゆらんと琴を引

て紛らはし給と也薫の心也 たゝさなからとは其まゝ

置なからと云心也

心入たる人は—— ものゝ音に心いれたる人也少し引て

引もはたし給はぬを消かへり聞たがる人あると也

よつかぬ川の音も—— 侍従か心也いつくの河の

ㄥ (76ウ)

ㄥ (77オ)

中よりも浮舟の出給ふかと思ひてゐたれ共叶ぬと也

夷哥しつゝ 末忘却

(三行分空白)

(白紙)

手習

卷の名詞に依て号せり手習したる由処ニあり浮舟
身をなけし涙の川の早き瀬にと有しより手ならひと
いふこと葉卷ノ中ニ四所あり野山の雪をなかめてもと有
所にもあり例のなくさめの手習を行ノ隙にし給ふ共
あり 薰廿六七かけるふの巻ノ初と同時たるへしうき
舟ノ失て翌日ノ事也そのとしくれて次の年ノ春の事迄あり
花鳥にはかほる大将廿三とあり如何々

(一行分空白)

その比横川に—— 古抄共にくはし不及注

古朱雀院の—— 寛平たるへしか様ニ見て時代よく

相合へり

あなような 無用也

みづし所 臺所かたノ事そ

夜ふかきまいりものゝ所—— 臺ところ也

人にをはれ—— 或被悪人遂普門品

御車よせて 尼君の

六十ムデ

いかなりつらん—— 初の夏をしらねば也

押紙。

└ (77ウ)
└ (78オ)
└ (78ウ)

└ (79オ)

かりの物 変化のもの也

宮の御女^{ハスメ} 大君の支

つぎのには 僧都のいもをとの車そ

くるしと思給^ツへし かやうニよめり

いとぎよげに むさき所いさゝかなし

御ようめい哉 容^イ顔

さらに聞ゆることもなし 誰人ともきこえずと也

いくやう—— 生^{イクル}るやう也

け^イうらなり

御心をたてゝは—— じやうごはなる心也

竹とり ともし清

ことさまにて 縁付などの事也

都鳥に似たる事は—— 都人の事也有やなしやの

心もこもれり

忍やかにておはせし—— 手習ノ君ノ心也薰ノ夏を思

いて給也匂の御事と見ても相違すへからす

心地なからぬさま—— 心あるさま也

したひまとはさるゝ人 纏

つゝみなき心ち 隔心なき也

いふかひなくなりにし人 尼のむすめ

姫君は我は我と—— 手習ノ君の心也尼君は別の事を

云給へとも吾はわか思ふ事斗おもふとなり

いかて御らんしつらんといふ 少将の詞也

「
(80才)

「
(79ウ)

其まゝにもいはず 有のまゝにいはず

おやのとのかちに—— 中將の親也

なみたたくみて—— 是よりうき舟の

打多みてそ—— 尼君の

せんじの君——を野に立よりて—— 中將との物

かたり也 小野に——ト云は中將の詞也

わつらはしけれと—— 尼のことは也

ましておほしよそふらん方に—— 少將ノ詞なり尼

君のむすめニおほしよそふニ付てはと也

こたみ 此度なり

まつちの山となん——契ル人有らんと也

本哥河海ニあり

世をこめたる—— よこもると同詞そ 行末遠キ意也

すかし給にこそ—— たらし給也

わつらはしきこえ給める—— 浮ふねノあまりなる心

と尼きみノ煩らはしかるなり

引うこかしつへくいふ 中將ニあはせたくて也

過にしるかた—— 中將の詞

をちなる里も—— 此事何共しれす定て曳哥あるへし

よひまとひもせずおきゐたり 僧都ノ母也

をうなは 同人

うち笑ひて 中將の

笛の音をもたつねすたゝをのか心をやりて——

「(80ウ)」

「(81オ)」

中將の吹笛をもうかゝはす引

聲やめつるを——調子のちがうニよりて聲を止ける也

たけふ。ちりくたんな 琴のしやうが也

もばら 専なり

忘られぬ——むかしの姫君の事也

いとゝ侘たるは——尼公ノ様躰なり

かへりし程も袖そぬれに——手ならひの君ノ事ニよりて

袖ぬるゝ也

めつらしからぬも——尼の返事又同し事也

尼君みつけて 僧都のいもとの

杉のもとだち たもし濁

我はと思ひてせんせさせ——少將の尼我は上手と

尼ひたいのみつかぬに かもし濁ル

きこえ給ん夏も聞せ給へ 爰ニ句を切てしみつかん——と讀へし

物おもふ人は——浮舟の君ももの思ふ人なれば也

聞えうこかせと ともし清

人よりもけに けもし清

物ごりし給へるか かもし清

打すがひ 打つゝく也

しうねげなる けもし濁れり

おそろしき物の中ニあらましかと かもし清

思はずにてたえすぎ——堪過欵

親ときこえけん人 八宮ノ御夏

「(81ウ)」

「(82オ)」

「(82ウ)」

「清」ト「濁」ヲ重テ書キ。

かくてこそ有けん—— 薫ニ聞付られたてまつらんは愧
うちうなつく 大尼きみの かしからんと也

東の御かたは 妹の尼也

いらへし給ふ うき舟也

いかておはしますらん—— 御座ありにくゝ有らんとの僧

都の詞なり

みずほう 御修法

あなあきましや—— 少将の尼のことは也

るてん三かい中なといふも 流転三界中恩愛不能断棄

恩入無為真実報恩者 落髪の時の文そ

とみに—— 浮舟の心中

人く出しまりぬ

今は限りとおもひはてられて てもしの清濁いづれもくるし

からす然共清はまされり三光院殿も清給り

おほとれたるやうに ともし濁てよし

六かしき事ともいはて

いらへをもし初しと しもし濁へし

心こそ—— 尼ニ成て心易ければ是程の返支はし給也

おなし御帳に—— 僧都あかしの中宮一品宮なと
なるへし

消うせにけん人を—— 明石中宮の御心也

お前なる人も 宰相の君也

かたきたちたる人—— 敵を持たる人の様に忍ふ也

はかなき物に—— はつかしくなん—— うき舟の耻ル也

ㄥ (83ウ)

ㄥ (83オ)

僧都のことは也

衾門あかつきいたりて——

セウセント讀ヘジ

此あらん命は—— 見河海咲花等 陵園妾トハ天子ノ

陵のあたりニ宮仕の女を置テ其女の哀也

かくはおもはずこそ—— 我かく急せめずはかう

早くは見まじいと也

五重イツヘのあふき 五重は三重ミヘより廣

まめやかにかたらふ 少将ミナモトの尼ニ

行末心ほそく—— 尼君の詞也うきふねノ行末を

さのみ さうのみなり

けふもかなしき 今日もくとも也幾日もと云心なり

桜かさしてけふも暮しつの哥カの類也

こやにあかたてまつらせ給ふ 後夜

袖スベふれし—— 薫の夏欵本心ニなるにしたかひて

薫の事をおもひ出給へし

卅ミチはかり 卅ミチか様ニよめり

常陸のきたの方 うき舟の母義にはあらず紀守かいもを
と也

花鳥ノ説あやまる咲ニくはし

其御をとうと 浮ふねの心中ニなり 八宮ノおとり腹ノ也

ことにふかき心もなげなる—— 浮舟の心

きはことなる—— 年も老てとつくとしたる様子也

わすれ給ぬにこそはと 匂宮ノ也浮舟の心

むかしの人あらましかは—— 尼の女の事

「(84ウ)

「(84オ)

所のさが—— 大君もうき舟も失給へは也かもし濁へし

おぼしとゝめつ あかしの中宮、

君ぞことゝきゝ合せける 悉 小宰相を指ての

聞てのちも—— 小宰相かいふをきゝての後也 給り

かほるの心中也

さなの給ひそと聞えをきて—— 中宮ノ匂には仰

られしかとも我ニなの給そと匂ノ仰ありしにやと也

宮もかゝつらひ—— 匂宮也

大宮にさるへきつゐてつくりいてゝ—— 匂ノ知たまふかを

試ン為に中宮に薫のかたり出し給ふ

あふれて ふもし濁

世かたり

中堂には時ゝ—— 夢の心ちにもあはれをもくわへむと

有けむ 夢のうきはし書ン序をこゝニ書出たり にや

(六行分空白)

追

おこなひせし法師の 誰共なし

かの女のやうそく一くだり—— 吊ニさうそくを

して手向ル事ありと也

さたすきたる尼びたひのみつがぬに—— 是は

浮舟の心也此尼ノ物このみするニ用なき碁をうちしと

河海の心也 林

きやうざくなりける人の御ようめい哉—— きやう

「 (85ウ) 」

「 (85オ) 」

さくとはほめたる詞なり 御ようめいとは御容顔也 みめ

かたちの事也 休 御よそひかなとある本もあり其は

御よそほひ也 二葉 還^{キヤリダク}迹 すくれたると云詞そ

とみには読もきかせつへくも—— 尼君のゆるさゝ

し更也 二葉 出家の事皆云いさまたけしに り

様もなくなりつるをうれしと也 林

一の所も—— 関白家の事也 イチノトコロト 讀へし

ほとくすけもし給つへかりきかし—— スヶ 出家也

(六行分空白)

(白紙)

(白紙)

夢のうき橋

慶長十三四月十九日ニ御講釋終先年称名院殿之御

講釋も今日終と御物語也 今日石山之御縁日ニよりて也

夢の浮はしと題号河海ニ委し能く披見あるへしこゝに

注するニ及す 此名源氏一部ノ通号也惣名也五十四帖

皆夢なりく 夢と計はつきもなくいひ

にくきに依てうきはしといへり浮はしニ心なした夢と

心うへしうきはしは詞のかさなり也 定家卿春の夜の夢

うきはしと絶して——此哥も別ニ心なした夢の事まで

也 此卷手習ノ卷ニつゝけて書り一まきともみるへし

此卷法の師とも云也 桐壺をつほ前さいとも云か

薰廿七歳也 花鳥には廿四とあり如何 手習ノ卷の末は

「 (86才) 」

「 (86ウ) 」
「 (87才) 」
「 (87ウ) 」

「 (88才) 」

春也此卷は夏にいたると見るへし

(一行分空白)

夢ノ事ニ付て仰らる 六夢と云て品六あり 正夢孔子ノ夢ノ類
 霊夢待従カ夢ノ類 思夢御息所ノ夢ノ類 瑞夢 喜夢丁酉カ夢ノ類
 同前 恠夢朱雀院ノ夢ノ類 少々忘却す不可有正儀已来猶可奉
 問先達不恠ニよりて押帊ニ書之

(二行分空白)

くち尼 くもし清てよし
 うきたる心ちも—— 慥ならぬ心也

こゝにうしなひたる人なん—— わか失たる人也薰ノ
 はかりおもひえて—— 分別思案をして也

天く—— 天くうと讀給り 天くとは根本は星ホシの名
 也而れ共爰はた々天魔の事也

三月はかりは ミツキト讀給り
 こしん こもし濁

すけせしめ—— すけとは出家也 スハシユノ直音也 悉曇ニアル事ソ
 なき人と同じやうに—— 出家したるは無人とおなし

事也 僧都の心也
 はふれ給けんにかと ハーフレ

あしき物に—— 同人の詞也 僧都の詞ソ
 なまわかとをりなと—— 薰ノこと葉也

をちあふるへき 濁ル
 びんなき びんなきと讀給り

⌋ (88ウ)

⌋ (89オ)

押紙。

あぢきなく心みたれぬ 僧都ノ心也

まかりをりん事—— 僧都の返答

打つけにいられんも—— 心奠し也

くはしくとり申つ とりニ心なし委ッ申ッと計心えへし

ぞくのかたちにて 俗ノ形

日なかるへき びんなかるへき

すゝろなるやうには—— 近キゆかりなれは也

ひきほし 引干 海草なり ほもし濁

まことにさにやあらん—— うき舟の心也

おとあらゝかに聞えゐたり 泣時はあらく物のい

はるゝもの也

こぎみ 小君

さはたしかなる は文字にこるへし

一日のすけの—— 一日と讀て然るへし 出家

夢のやう也 夢の事三あり是三ッめ也

いとかたひ事哉 かくし難き也

ふしめにていへは なみだぐみてうつぶしニなる躰なり

をしよせてまつりたれは うき舟を

さしすぎ人 尼ノ事たるへき歟

さらにきこえん方なく—— 薫の御文言也

さま／＼につみをもき—— 匂の御更又は入水の事なと

法のしと—— 薫の歌そ 僧都ニ佛法の更をは 也

尋もせずおもひもよらぬ事ニまよふと讀給り

「 (90才) 」

「 (89ウ) 」

はれぐ——

常よりも—— 小君へ尼の詞也

うつし語れとも こきみの云し様ニ又浮ふねニ云傳えける也

山風吹とも 異本 山深くとも

本に侍める 終の詞也此言葉のなき本もあり然共此語の

ある事尤也と素然仰られ候

(一行分空白)

追

さし過人いとありかたく—— 尼たちの事也薫の

文を見てうつくしとて有かたかる也

すけせしめてし てしは詞なり弟子にはあらず

(七行分空白)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

┐ (90ウ)

┐ (91オ)

┐ (91ウ)

┐ (後遊紙オ)

┐ (後遊紙ウ)

┐ (裏表紙)

左下ニ「實踐女子大学図書館印」
 角印「(朱単辺長方)印」
 角印「(常磐松文庫印)」
 左下ニ「月明荘」
 角印「ヲ捺ス」
 左下ニ「ヲ捺ス」
 角印「(朱単辺長方)